

大分とり天・宮城牛タンラウンド合同開催報告

テーマ:豊かなスポーツライフを実現及び継続するための資質・能力を育成する授業づくり

初の合同開催として、まさに南と北からサンドイッチして体育の学びを盛り上げる会となりました。参加された方々は、小学校関係者が多かったのですが、学生、会社員の方も参加いただき、多角的多面的に体力向上や授業力向上について意見交換をすることができました。ありがとうございました。

日時 令和4年12月17日(土) 13:00~16:30

参加者 小学校関係者 8人 中学校関係者 1人 高校関係者 1人 大学関係者 3人 学生1人 会社員1人

■ オープニング

少人数グループで自己紹介タイムを行いました。短い時間でしたが、日本全国から参加いただいた皆さんが、積雪量の違いや学校環境の違いなどの話題を介してweb上でつながり交友の輪を広げました。

■ 実践報告1

「運動の特性を味わい、自ら考えたり工夫したりして、動きを高める体育学習をめざして」

～思考力・判断力・表現力の向上をめざした支援の工夫～

別府市立上人小学校 教諭 佐藤 真 氏



5年生のマット運動の実践を通して、子供たちが自ら考えたり工夫したりしながら、自分の動きを高めるようになるために必要なことについて報告していただきました。「技のポイントや習熟過程を明らかにしておくこと」「考えられる解決方法を選べるようにしておくこと」「協働的に解決できるようにペアやグループを編成しておくこと」等が大切で、中でも技のポイントや習熟過程を子供同士で共有できる「技能レベル」の提示が重要であることが話されました。この「技能レベル」を基本に自分の達成状況を確認したり、課題を明らかにしたりすることができます。そこで明らかになった課題を解決するために、解決方法を選んだり工夫したりしながら、子供たち自ら動きを高める

姿が多く見られたことが成果としてあげられました。課題としては「思考力・判断力」の評価で「十分満足な姿」を指導者が明確に描いておくことより効果的に評価したことが指導に活かされることがあげられました。子供たちがキビキビと動き、仲間と協力しながら動きを高めようとしている姿が多く見られる活気のある授業の実践報告でありました。

■ 実践報告2

放課後の子供の遊びをプロデュースする ～子供の体力・運動能力を高める地域と学校との連携～

宮城県塩竈市 有限会社フジサキスポーツ 代表取締役 藤崎 雅久 氏



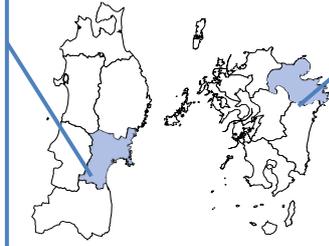
子供の体力・運動能力の低下、放課後の遊び場不足の問題を地域・学校・行政が連携して解決を図っている事例を紹介していただきました。体育科の授業において、子供たち自らが考えて動けるようにするためには、その土台となる遊びの体験が必要だと考え、市に問題提起をし、塩竈市内6校において放課後の子供たちの遊びをプロデュースする「わくわく遊び隊」を立ち上げた藤崎さんに、立ち上げから現在に至るまでの実践を話していただきました。学校教育だけにとどまらず、地域も体育科の学びを支える柱として関わっているという力ある実践報告でした。

今後は、体育科の年間計画との関連性を図ること、地域部活動への発展を図っていくことを検討しています。これからの発展が大いに期待できる取り組みです。

■ フリートーク 実践報告について

宮城から大分へ

- ・素地づくりの運動が素晴らしい。子供たちも目的を理解して身体を動かしていることに感心しました。
- ・フリートークでは、技のポイントを教師が示すか子供たちが気付けるように導くかが論点となり学びが深まりました。



大分から宮城へ

- ・週3回の学校体育と放課後の遊びをリンクさせて地域と共に子供を育てていくことは効果的だと感じました。
- ・幼児期から小学校へのつながりを意識して考えて動ける身体をつかっていくことが大切だと考えます。

2つの実践発表を受けたフリートークでは、宮城県の先生方から大分県の小学校には体育専科がいることに驚きと羨望の声が上がりました。大分県の先生方からは、地域が先行して考えて動ける体づくりに興味関心が集まりました。初めての合同開催フリートークは、地域における「当たり前」「慣習」が違って面白情報交換の時間となりました。

■ ワーク 思考・判断・表現の努力を要する生徒への支援(手立て)を考える

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部スポーツ教育学科 教授 佐藤 豊 氏

小学校、中学校、高等学校グループに分かれ、それぞれ予想される概ね満足に至らない事例とその事例に対する手立てを話し合いました。経験年数、立場、所属県の異なるメンバーでの話し合いは、新たな気づきを促したり合意形成を図ったりしながら進み、まさに、主体的で対話的な深い学びが得られたように感じます。小学校で学級担任をしている先生方からは、「体育科だけではなく、他教科においても活用できる視点や手立てが得られた。」という声が聞かれました。考えて動ける身体をつかっていくために子供たちとともに試行錯誤していく勇気と元気がもらえました。

(2班高校)グループ メンバー(塚本先生, 佐藤若先生, 後藤)

校種 学年領域	高等学校(その次の年次以降)	球技	ゴール型
例示	選択した運動について、チームや自己の動きを分析して、良い点や修正点を指摘すること。		
思考・判断・表現の元とした例示	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴール型では、状況に応じたボール操作と空間を埋めるなどの動きによって空間への侵入などから攻防をすること。 ・味方が作り出した空間にパスを送ること。 		
	想定される事例	手立て	
話し合い活動参加への停滞	専門性の高い生徒がリードしてしまい、その他の生徒が聞き手に回ってしまう	・専門性の高い生徒をファシリテーターにする【場の構造化】	
発見すべきポイントの理解不足	専門性の高い生徒がリードしてしまい、その他の生徒が聞き手に回ってしまう	<ul style="list-style-type: none"> ・知識のキーワード化したり、提示したりする【共有化・視覚化】 ・場面となる時点の数秒前の状況を映像として提示する【視覚化】 	
指摘する理由とポイントの結合ができない	アドバイスされていることは分かっているけど、うまくできない		
他者への伝達ができない	伝えたいことをうまく言語化できない	発表原稿のようなシナリオをつくる【適用化】	

(小学校低・中学年)グループ メンバー(佐藤・前田・今井・佐々木)

校種 学年領域	小学校3・4学年	球技	ゴール型
例示	マット運動		
思考・判断・表現の元とした例示	自己の能力に合った課題を見付け、技ができるようになるための活動を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えること。		
	想定される事例	手立て	
話し合い活動参加への停滞	話し合いの目的を理解できない	<ul style="list-style-type: none"> ・体育だけではなく学級づくりと連動して手立てを講じていく ・グループづくりの工夫 ・最初のゴールを子供と共有する(話し合いの意義) ・話し合いの目的の具体化 ・話し合う必然性を生み出す 	
発見すべきポイントの理解不足	見る体の部位が絞れない	<ul style="list-style-type: none"> ・教師がポイントを提示する(ポイントを探る段階から始めると時間を消費してしまう) ・子供と一緒に考える(時間にかかると理解が得られる) ・シンプルに分かりやすいポイント ・オノマトペのような感覚で捉えやすいポイントを与える 	
指摘する理由とポイントの結合ができない	技と動きを理解しているが、ポイントと結びつけて考えることができない	<ul style="list-style-type: none"> ・表現と思考を結び活動の確保 ・子供の言葉で何回も繰り返して伝えることで、動きと思考が繋がっていく ・ICTの活用 ・ペアでポイントを絞って撮影し、手本と見比べて動きの違いを伝える(矢印やキーワードを書き込んで伝えることも有効) 	
他者への伝達ができない	何を言っているかわからない	<ul style="list-style-type: none"> ・付箋や写真の活用 ・言葉で伝えることが難しいときは、記号やワードで伝える ・オノマトペから言葉へ(教師がつかなく) ・感覚的な言葉で伝達する→表現できる子が言葉で言い換える これを繰り返すことで全体の表現力が上がる 	

■ 振り返り

日本女子体育大学教授 高橋 修一氏

「思考・判断の中にもレベルがあること」「知識には、汎用的な知識、具体的な知識、方法的な知識があること」について指導と評価の計画など具体的事例を基にしながら紹介してくださいました。中でも「思考力、判断力、表現力等の具体」として中学校第3学年水泳の例から、「体の動かし方や運動の行い方に関する思・判・表」「体力や健康・安全に関する思・判・表」「運動実践につながる態度に関する思・判・表」「生涯スポーツの設計に関する思・判・表」があり、それぞれが評価できるように授業で取り上げる内容や活動を工夫していく必要性などについて話してくださいました。このお話を受けて『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料を各校種に合せて再度読み直し、教師の授業改善、児童生徒の学習改善がなされるようにしていかなければならないと感じました。